

2018



中部学院大学大学院

21世紀の共生社会の創造は、人間福祉から始まる

修士課程

修士課程では、研究者としての基礎的能力と専門知識を身につけ、博士課程に進学する人材を養成するとともに、福祉分野において理論と実践および創造力との調和のとれた高度な専門職業人の養成を行い、社会的要請に応えることのできる人材育成をめざします。

さらに、修士課程の特色として、次の点が挙げられます。

1) 一般入試の他に、社会人入試および本学の学部からの進学希望者には学内選抜入試の制度を設けています。

2) 社会人に対しては、門戸を広く開き、社会人入試制度を用意しています。社会人の学びやすい条件を考慮して、カリキュラムの時間割を昼夜開講に拡充し、講義の開講場所も科目によっては岐阜駅からの交通を考慮した各務原キャンパスに設けるなど、学びやすい環境を整えています。また、同額の授業料で3年かけて修学できる制度及び特に優れた研究業績を挙げた場合には1年以上在学すれば修了できる制度を用意しています。

3) 本学研究科では、時代の要請に応える21世紀型福祉社会構築に向けた人材養成をめざします。また、諸科学の連携と協働を含む学際的かつ総合的アプローチの必要性から、社会福祉系学部の卒業生を対象にするだけでなく、他分野からの卒業生を積極的に受け入れています。そのために、人間福祉学部の聴講を可能にし、基礎科目を重視しています。その上で、人間福祉学特講科目を選べるようにしています。

博士課程(後期)

博士課程(後期)においては、修士課程において培った研究能力を基礎として、専門的な研究指導によって学識と識見を深め、人間福祉学の専門研究者として自立して研究を進めることができる能力を養います。そして、将来において人間福祉学研究・教育の中心的担い手となることが期待できる人材を育成するとともに、人間福祉の現場において人間福祉学を基礎とする高度な研究・開発能力、指導力を備えた専門従事者として、関連諸領域の専門職者と協働して活躍できる人材を養成することをめざしています。

修了まで(カリキュラム)

授業と単位

本学はセメスター制を採用しており、4-9月が前期、10-3月が後期です。授業の1コマは90分で、講義、演習とも半期2単位、通年4単位です。

毎週の授業の他、隔週での授業や集中講義、あるいは、それらの組み合わせにより授業を行うこともあります。また、大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例を実施し、昼夜の時間において授業又は研究指導を行うことにより、大学院での履修がしやすくなるよう配慮しています。

修士課程

修士課程の修了に必要な単位数は、必修科目18単位、人間福祉学特講科目から12単位以上、合計30単位以上です。

修士(社会福祉学)の学位取得には、2年以上在学し、上記の修了要件単位の修得を行い、さらに必要な研究指導を受けた上で、修士学位申請論文を提出し、論文審査及び最終試験に合格することが必要です。

科目名・科目区分	単位数	履修方法
人間福祉学総合研究	2単位	必修
人間福祉学特講IA~IH 人間福祉学特講IIA~IIH	12単位	特講科目16科目32単位から12単位以上修得する
人間福祉学研究IA	2単位	必修
人間福祉学研究IB	2単位	必修
人間福祉学研究IIA	2単位	必修
人間福祉学研究IIB	2単位	必修
特別研究指導IA	2単位	必修
特別研究指導IB	2単位	必修
特別研究指導IIA	2単位	必修
特別研究指導IIB	2単位	必修
合計	30単位	

大学院担当教員の紹介 (福祉系のみ)

宮嶋 淳 (みやじま じゅん)

専門 福祉社会デザイン研究、
分野 ソーシャルワーク、福祉人材開発

福祉社会とは「誰もが生まれてきて良かった」と思える社会だ。そうした社会を創造していくことを福祉社会デザインという。その手法と学問として、私は「ソーシャルワーク」に価値をおき、「ソーシャルワーカーの実践力」に着目する。市民から「期待される」社会の有り様、それを支える人材の養成・教育・開発を、2035年を念頭に置き考えている。

谷口 真由美 (たにぐち まゆみ)

専門 ソーシャルワーク理論と実践
分野 援助技術論・権利擁護

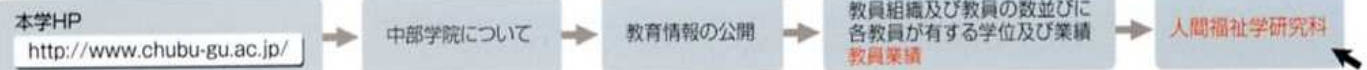
第三者評価事業が社会福祉施設に根づくための研究を通し、サービスの質の向上・より良いサービスを受ける国民の権利の実現を目指している。これまで、研究の成果が福祉現場に働く人々の環境整備と、利用者への支援に反映されることを目指し取り組んできた。

大藪 元康 (おおやぶ もとやす)

専門 社会福祉学 特に
分野 「社会福祉財政」「社会福祉計画」

社会福祉基礎構造改革以降、社会福祉のサービスはより一般的になったといえる。しかし、そのサービスを提供するための財源には大きな課題がある。また、社会福祉サービスにも「経営」の視点が入り、サービス提供によって利潤を得ることがあたりまえになってきている。この状況の中で、社会福祉とは何なのかを整理し、「人間福祉」とはどのような状況を実現することなのかを提起していくことが必要であると考えている。

研究内容・実績の詳細は下記のHPをご覧ください。



人間福祉研究科
人間福祉学専攻 教授

宮嶋 淳
(みやじま じゅん)

大学時代から社会福祉学（ソーシャルワーク）一筋で、実践現場・職能団体・教育研究の契機を得てきた。「どうしたら幸福になれるのか」という問いが出発点であり、ライフワークでもある。

私が提唱する未来志向型人間福祉学は「生まれてくる子ども」を基点とする。これは子どもの権利擁護システムと福祉社会をデザインしていく研究である。この領域にかかる研究で私は、【博士(ソーシャルワーク)：東洋大学】を得た。わが国では、血のつながりが家族の絆の前提であると考えられる傾向は根強い。「子どもが欲しい」と願うカップルの多くは「私たちの子ども＝血がつながっている＝遺伝子が継承される」を想定している。6組中1組以上とされる不妊に悩むカップルの多くは「養子縁組」ではなく「不妊治療」で、子どもを持つという願いを叶えることを選択する。わが国の不妊治療の水準は、世界的な高レベルにあり、医療技術としての安全性や信頼性は保持されている。しかし、高度な不妊治療を経由した家族の絆の構築が、「子どもの最善の利益＝子どもの福祉」という観点を十分に吟味しているのかが疑問になる。

生殖医療の進歩は、ヒトの発生に対する医療の関与を可能とし、「ゆりかごから墓場まで」という福祉の範ちゅうを揺さぶり、出生以前におけるヒトの萌芽の段階から、ヒトの福祉を捉えていくための明確で説得力のある思想・哲学を必要とする。人間のWell-beingに関する社会科学である人間福祉学の範ちゅうは、かつて一番々瀬康子が紹介したスウェーデンの福祉と共鳴し「ヒトの萌芽（胎生期）」のあり方にまで及ぶ。問われているのは「生まれてくる子（次世代）の福祉」である。

次世代の福祉を問うとき、私たちが「次世代の意思」を聴くことができないということに留意が必要だ。にもかかわらず「次世代(子ども)の福祉」を実現させるためには「子どもの声」に耳を傾け、子どもが参画の梯子をのぼれるよう、条件・状況・環境を整えることが今、私たちにできることではないだろうか。とくにソーシャルワークが担う権利擁護とは、当事者の声（非言語含）を無私・無知の姿勢（先入観に囚われない）で聴くことから始まり、価値を創造することだ。

私の立場は、高橋重宏のソーシャルワークが得意とした「当事者主体」の理念に基づき、社会をデザインするという帰納法的研究アプローチである。また、京極高宣のアプローチから学んだ、他領域の基礎的英知の援用・応用による理論の構築である。2035年を念頭におき、今、注目しているのは生命科学や生殖医療に関わる英知であり、地域を生命体と見立てる新しいアプローチ（＝地域生命学的アプローチ）の有効性を研究し、福祉社会のデザインの創造にも寄与したいと考えている。これまでの活動は、本学WEB研究室に公開している。

WEB研究室 (http://web2.chubu-gu.ac.jp/blog/web_lab0/miyajima/index.html)
研究室としての年次報告は、ISSN-L:2432-7093 で刊行している。



中部学院大学大学院 人間福祉学研究科

〈関キャンパス〉〒501-3993 岐阜県関市桐ヶ丘2-1

TEL 0575-24-2211(代) FAX 0575-24-0077

〈各務原キャンパス〉〒504-0837 岐阜県各務原市那加甥田町30-1

TEL 058-375-3600(代) FAX 058-375-3604

E-mail nyushi@chubu-gu.ac.jp

URL <http://web3.chubu-gu.ac.jp>